



52 小森忍《仿霽紅宝相華紋花瓶》 一点

大正後期、昭和初期（一九二二～二八） 陶磁  
径一九・九、高三一・二

小森忍が満洲に渡り大連で築いた匂雅堂窯で焼成した作品。光沢を抑えたマット調の白釉の上から辰砂釉がかけられ、その辰砂釉が陽刻で表した宝相華文様の部分で流れて、輪郭線だけがほんやりと白く浮き上がっている。辰砂釉は、満洲で中国古陶磁を研究した小森が得意とした釉薬技法の一つで、小森が命名した作品名の「仿霽紅」とは中国陶磁の技法である「霽紅」に倣ったという意味である。匂雅堂窯の定期作品発表展覧会の記録によると、大正十三年（一九二四）十二月の第七期展覧会に「明霽紅の研究作品」を発表したとあり、本作もその頃に制作された可能性がある。本作品は香淳皇后の御遺品であるが伝来は不明、作者の題簽が付く共箱に収められ、作品の高台内には「匂雅堂」の銘印がある。

小森忍（一八八九～一九六二）は、京都市立陶磁器試験場の技手を経て、大正六年に大連に渡って南満洲鉄道株式会社に入社、中央試験所窯業課に所属、十年に同社を辞めて匂雅堂窯を創設した。中国各地の古窯を調査しながら制作を続け、昭和三年（一九二八）に帰国し、愛知県瀬戸市に山茶窯を開いた。西洋食器の東洋化など意欲的な試みを手がけた山茶窯の閉鎖の後も、国内各地の窯業新興に務め、戦後は北海道に移り北斗窯を創始して窯業技術の指導に当たった。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

1920s-30s モダン・エイジ — 光と影の造型美

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 70

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十七年九月十二日発行

© 2015, The Museum of the Imperial Collections, Sanmonmaru Shozokan